

# 海外食料需給レポート

## （平成31年3月）

平成31年4月16日

農林水産省

# 海外食料需給レポートについて

## 1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、そのうち、主食や飼料原料となる主要穀物(米、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、安定供給に向けて世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

## 2 対象者

このレポートの対象は国民の方々の中でも、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

## 3 重点としている事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

## 4 公表頻度

月1回、月末を目処に作成、公表します

## 5 ここに記載のない情報は以下を参照願います。

### (1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

### (2) 農林水産関係機関の情報(ALICの情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：[https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05\\_000168.html](https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_000168.html)

### (3) その他海外の機関(英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関(FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会(IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構(OECD)(農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム(AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省(USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社(CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省(AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局(ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

# 目 次

## 概要編

2019年3月の主な動き	1
2019年3月の穀物等の国際価格の動向	2
2018/19年度の穀物需給(予測)のポイント	2
2018/19年度の油糧種子需給(予測)のポイント	2
今月の注目情報	
インドの穀物需給動向	3

## (資料)

1 穀物等の国際価格の動向	5
2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	6
3 平成30年9月以降の食品小売価格の動向	7

## 品目別需給編

### 穀物

1 小麦	1
2 とうもろこし	5
3 米	8

### 油糧種子

大豆	12
----	----

## 【利用上の注意】

## (概要編)

## 2019年3月の主な動き

### 1 2019/20年度の米国の作付動向

2月の米国農務省（USDA）アウトLOOKフォーラム以降、米国の2019/20年度の作付面積は、大豆については中国の輸入減等を受けて減少する一方、とうもろこしについては大豆より収益性が良いことから増加する見通しとなっている。

3月末に、USDAが3月前半時点の農家の作付意向面積調査結果を公表した。しかしながら、3月中旬以降に米国中西部で発生した洪水被害については反映されていないため、今後、洪水が長引けば、とうもろこしの作付面積の減少や生育期間の短い大豆への転換等の影響が想定されている。

### 2 南米の生育・収穫動向

ブラジルでは大豆と夏とうもろこしの収穫期が終盤を迎えている。2018/19年度の大豆の生産量については、乾燥の影響から史上最高の豊作となった前年度を5%下回り、113.5百万トンの見通し。

また、とうもろこしの生産量については、現在収穫中の夏とうもろこしは前年度比2%減産となるものの、大豆の収穫後に作付する冬とうもろこしの作付面積の増加により生産量が24%増加することから、全体では前年度を15%上回る92.8百万トンの見通し。これにより、大豆、とうもろこしとも一定の輸出余力が確保される見通し。

アルゼンチンでは、1月以降、降雨過多の状態が緩和され、良好な生育状況となっており、ブエノスアイレス穀物取引所の3月28日週報によれば、大豆は着莢期を迎え、生産量は53.0百万トン、とうもろこしは収穫が開始され、生産量は46.0百万トンと、干ばつで減産となった前年度をそれぞれ51%、45%上回り、大豆、とうもろこしとも輸出量は増加する見通し。

### 3 インドの穀物の生産と国内需給状況

インドの2018/19年度の穀物生産については、夏期の降雨に恵まれたことから米の生産量が史上最高の116.0百万トン、また、小麦の生産量についても史上最高の99.7百万トンの見通し。とうもろこしについては、夏期の降雨による順調な生育により生産量見通しが29.7百万トンに上方修正されたものの、作付面積減により対前年度比では減産の見込み。2019/20年産小麦については4月以降収穫を迎えるが、冬期の冷涼な気温による良好な生育状況から史上最高を更新する見通し。

インド国内の需給状況については、米は、生産量が需要量を上回り、輸出と国内備蓄が増加する見通し。また、小麦も、生産量が需要量を上回り、国内備蓄が増加する見通し。

一方、インド国内においては、人口増と所得水準の向上から、鶏肉の需要が年々増加しており、10年前と比較して2倍弱となっている。このため、飼料向けを含むとうもろこし需要も増加し、2018/19年度は生産量を上回ることから、不足分について輸入が検討されている。現時点では世界のとうもろこし需給に影響を与える数量とはなっていないが、引き続き、インドの穀物の需給・輸出入動向を注視する必要がある。

## 2019年3月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、2月下旬現在、160ドル/トン台半ばで推移。その後、米国産の輸出低迷や、米国農務省穀物等需給報告で世界及び米国の期末在庫量が市場予測を上回ったことによる供給過剰感等から、155ドル/トン台前半まで値を下げたものの、米国冬小麦産地での大雨被害による作柄懸念、春小麦地帯での洪水による作付け遅れの懸念等から値を上げ 3月下旬現在、168ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、2月下旬、144ドル/トン台前半で推移。米国農務省穀物等需給報告で世界の期末在庫が市場予測を上回ったことによる供給過剰感等から値を下げたものの、その後、米国産地での洪水被害による作付け遅延懸念から値を上げ、3月下旬現在、140ドル/トン台後半で推移。

米は、2月下旬、410ドル/トン台後半で推移。その後、タイ乾季作の新穀が市場に出回り始めたものの、タイのパーツ高や中国の輸入見込みによる国内価格の上昇から値を上げ、3月下旬現在、420ドル/トン台後半で推移。

大豆は、2月下旬現在、320ドル/トン台後半で推移。その後、中国向け成約にキャンセルが出たこと等から値下がりし、320ドル/トン台前半まで下落したものの、ブラジルの乾燥等による減産懸念から、3月下旬現在330ドル/トン前半で推移。

(注)小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

## 2018/19年度の穀物需給(予測)のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から上方修正され 26.1億トンとなるものの、消費量の26.4億トンを下回る見込み。

また、前月と比べ、期末在庫率は上方修正され29.5%となった(資料2参照)。

(注:数値は3月の米国農務省需給報告による)

生産量は、前年度と比較して、とうもろこし、米が増加するものの、小麦が減少するため、前年度をわずかに下回り26.1億トンの見込み。

消費量は、小麦は減少するものの、とうもろこし、米が増加するため、世界全体では前年度を上回る26.4億トンの見込み。

貿易量は、小麦は減少するも、とうもろこし、米が増加し、4.3億トンと前年度を上回る見込み。

期末在庫量は、7.8億トンと前年度に比べ減少し、期末在庫率も29.5%と前年度(31.3%)に比べ低下する見込み。

## 2018/19年度の油糧種子需給(予測)のポイント

油糧種子全体の生産量は、前月から下方修正され 5.93億トンとなるが、消費量も下方修正され5.82億トンとなったため、生産量が消費量を上回る見込みは変わらず。

一方、期末在庫の積増しにより、期末在庫率は前年度より上昇し20.9%となる見込み。

(注:数値は3月の米国農務省穀物等需給報告による)

## 今月の注目情報：インドの穀物需給動向

インドにおいては、2018/19年度の米及び小麦の生産量が史上最高となる見通しである。一方、これまで菜食中心の食生活であったが、最近の所得水準の向上によって鶏肉需要量が伸びており、これに伴い、飼料穀物の需要が高まっている。インド国内のとうもろこしの国内価格は昨年と比べて1.7倍に上昇し、輸入も検討されている。最近のインドの飼料需要を中心に穀物の需給動向をまとめた。

### 1 2018/19年度の穀物の需給動向

#### (1) 米

インドは中国に次ぐ世界第2位の米生産国であり、インド北部ではカリフ期(雨期)に年1回、南部から東部にかけてはカリフ期とラビ期(乾季)に二期作で栽培されている。最近の生産量は増加傾向で推移している。

米国農務省(USDA)によれば、2018/19年度は、全体の8割以上を占めるカリフ期(雨期)米が史上最

高となる116.0百万トンの生産見通しとなっている。増産の要因としては、降雨に恵まれ生育が順調であったこと、米の市場価格が安定していること、灌漑設備が整備されてきていること、食用穀物としてのソルガムやミレットの人気の落ちてきていることなどが挙げられる。

ここ5年間の需要量は概ね横ばいで、生産量が需要量を上回ることから、生産量の増加分が国内備蓄や輸出の増加につながっている。インド政府は昨年から農産物輸出に力を入れており、特に香りのする比較的高価なバスマティ米の輸出比率が増加している。

#### (2) 小麦

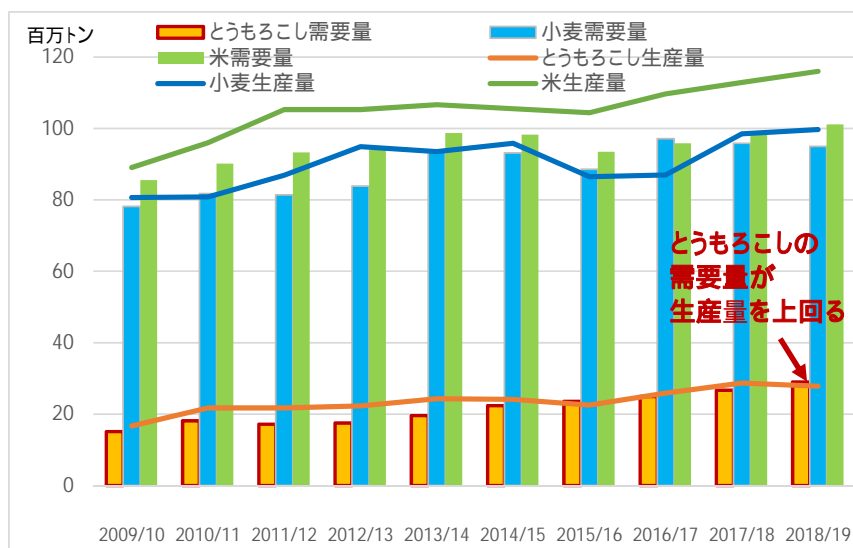
小麦の栽培はインド北部で米の裏作としてラビ期に行われている。生産量は、ここ3年連続で増加しており、USDAによれば、2018/19年度は、史上最高の99.7百万トンの見通しとなっている。2019/20年度は、今後、収穫時期を迎えるが、北部の産地で冷涼な天候に恵まれ、史上最高の生産量を更新するとみられている。

需要量も年々増加しており、用途は、ナンやチャパティなどの食用のほか、需要全体のうち4~5%程度が乳牛用向け等の飼料として使用されていると見られる。生産量が需要量を上回ることから米と同様に国内備蓄が増加するとみられる。

#### (3) とうもろこし

とうもろこしはインド全土で主にカリフ期に栽培されている。生産量は、ここ数年増加傾向

図1 米、小麦、とうもろこしの生産、需要量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2019.3)を農林水産省にて加工

で推移している。USDA によれば、2018/19 年度の生産量は、カリフ期の降雨に恵まれたものの、作付面積の減少により、前年度より減の 29.7 百万トンとなり、年々増加している需要量を下回る見通し。用途は 6 割近くが飼料向けで主に養鶏向け、2 割程度がコーンスターチ用に向けられていると見られる。

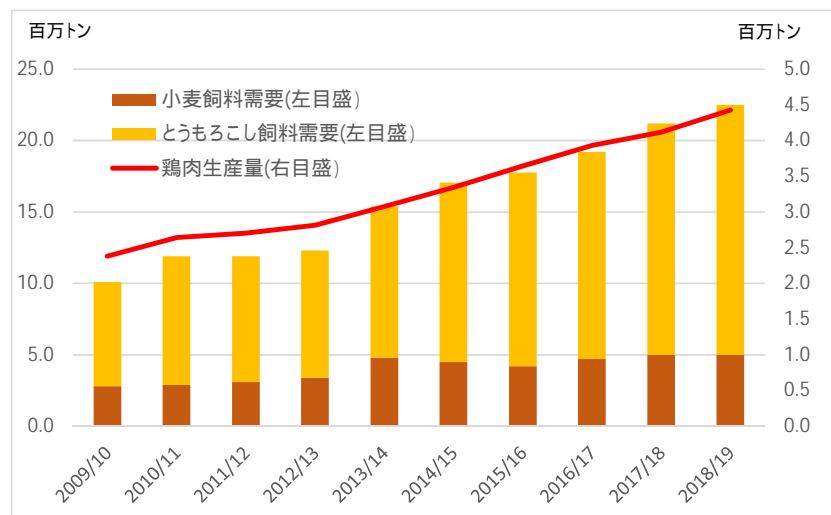
## 2 最近の飼料需要動向

### (1) 需要量

インドでは宗教上の事情から、ヒンズー教では牛は神聖な生物とされ、牛肉を食さず、イスラム教では豚肉を不浄として食さない習慣となっている。従ってインドで食される肉は鶏肉が中心となっている。

鶏肉生産量は、ここ 10 年間で毎年 5~7% 増加し、10 年前と比較して 2 倍近くに増加している。この結果、特にとうもろこしの飼料向け需要が増加している。

表 2 鶏肉の生産量と飼料需要の推移



出典：米国農務省「PS & D」(2019.3)を農林水産省にて加工

### (2) 価格

インド国内のとうもろこし価格は、インドの Business Standard 紙によれば、2018 年 1 月時点で 13,000 ルピー/トンで推移していたが、2019 年 2 月下旬には約 1.7 倍の 22,000 ルピー/トンまで上昇した。(2019 年 2 月現在 100 ルピー = 1.4 ドル程度)。生産拡大のため、とうもろこしの最低保証価格(政府買入価格)が前年より引き上げられたことが要因とされている。

### (3) 貿易への影響

とうもろこしの価格上昇に伴い、インド国内産と外国産との価格差が拡大したことから、飼料業界では、安価な外国産とうもろこしの輸入を希望する声も上がっていると報道されている。しかしながら 3 月時点では国内とうもろこし生産農家への影響もあることから、インドのとうもろこしの輸入関税の減免措置は発動されていない。

現地報道等によれば、インド国内ではとうもろこしは非 GMO しか流通が認められていないことから、今後、非 GMO とうもろこしを生産しているウクライナ等からの輸入が見込まれている。一方で、2018/19 年度に関しては、インド産のとうもろこしの生産量が上方修正されたことや、供給元となるウクライナのとうもろこしが豊作なことから、世界のとうもろこし貿易に与える影響は少なく、我が国が輸入している米国やブラジル産とは競合しないと見られている。

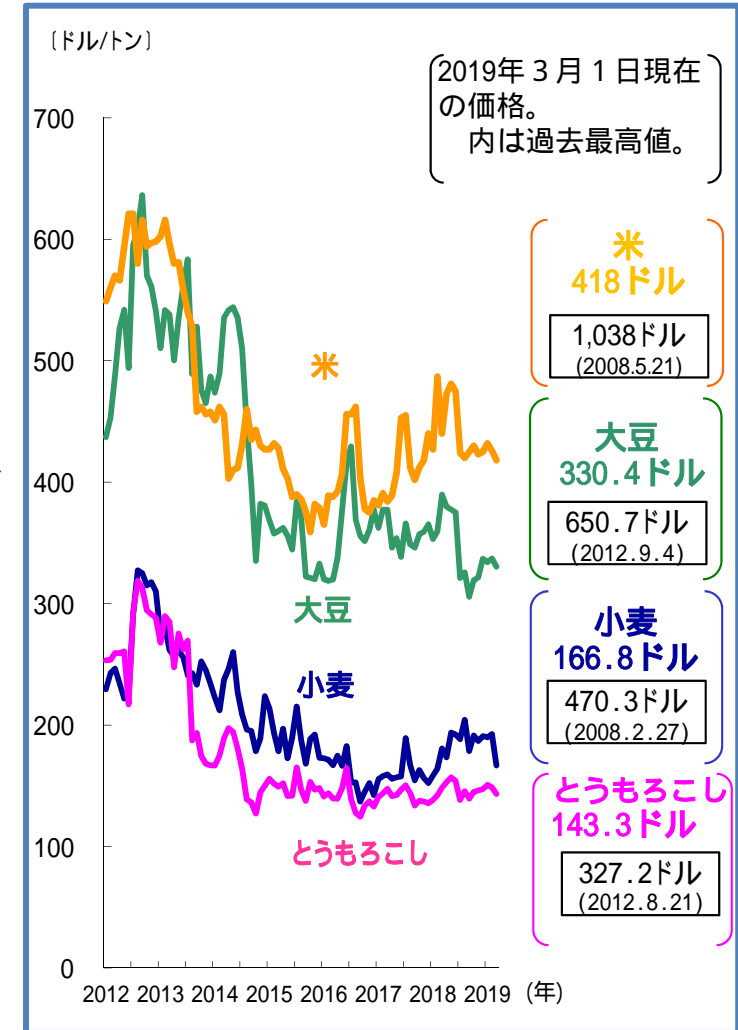
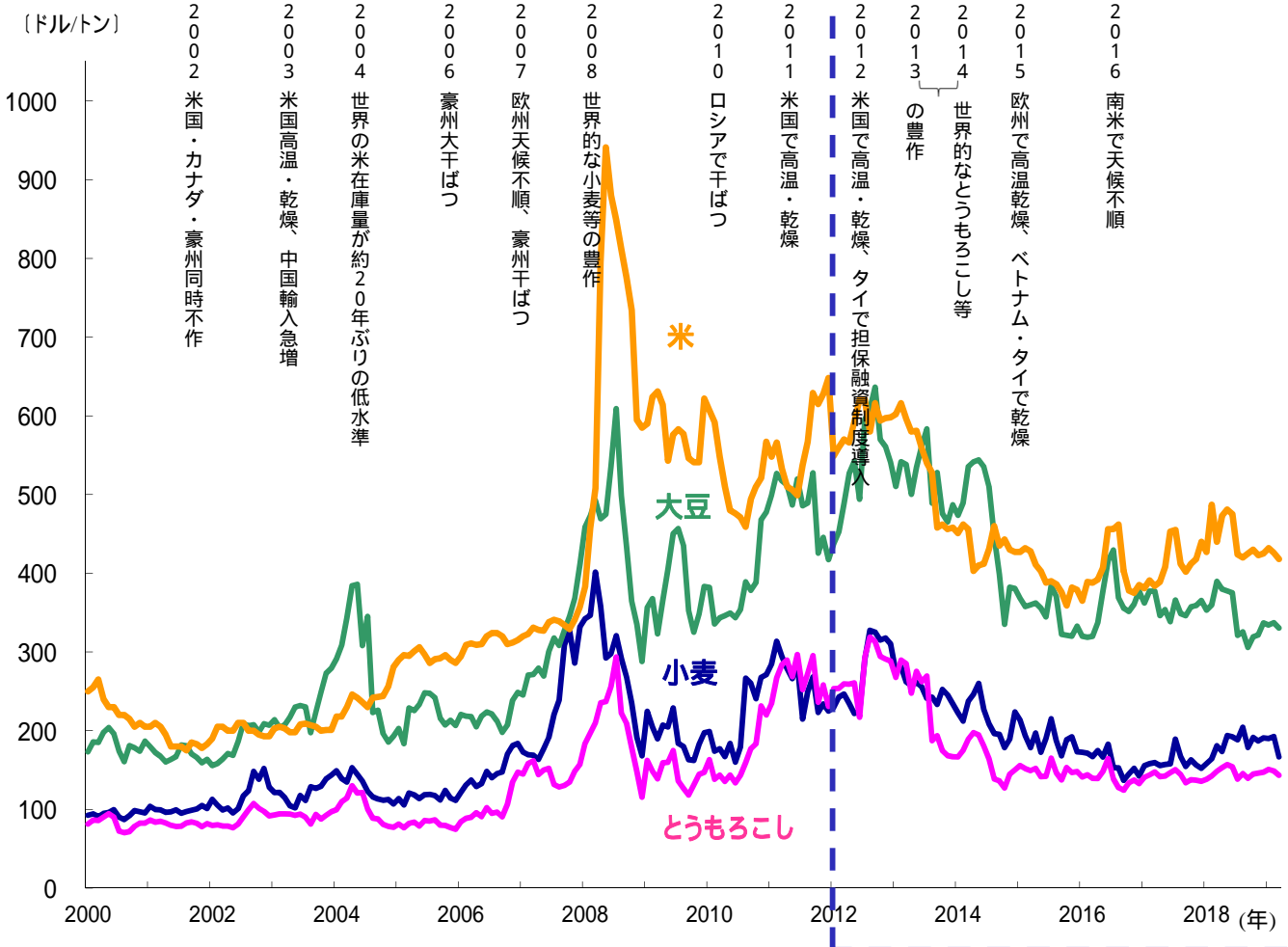
しかしながら、2019/20 年度以降のインドのとうもろこしの生産・価格動向によっては、大量の輸入が行われる場合も想定されることから、貿易動向を注視していく必要がある。



# 資料1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこしの豊作、大豆の南米での増産や米国での豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降横ばいで推移。米はタイの在庫放出等から低下したが、2017年以降上昇傾向。なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により2008年以前を上回る水準で推移している。

## 穀物等の国際価格の動向



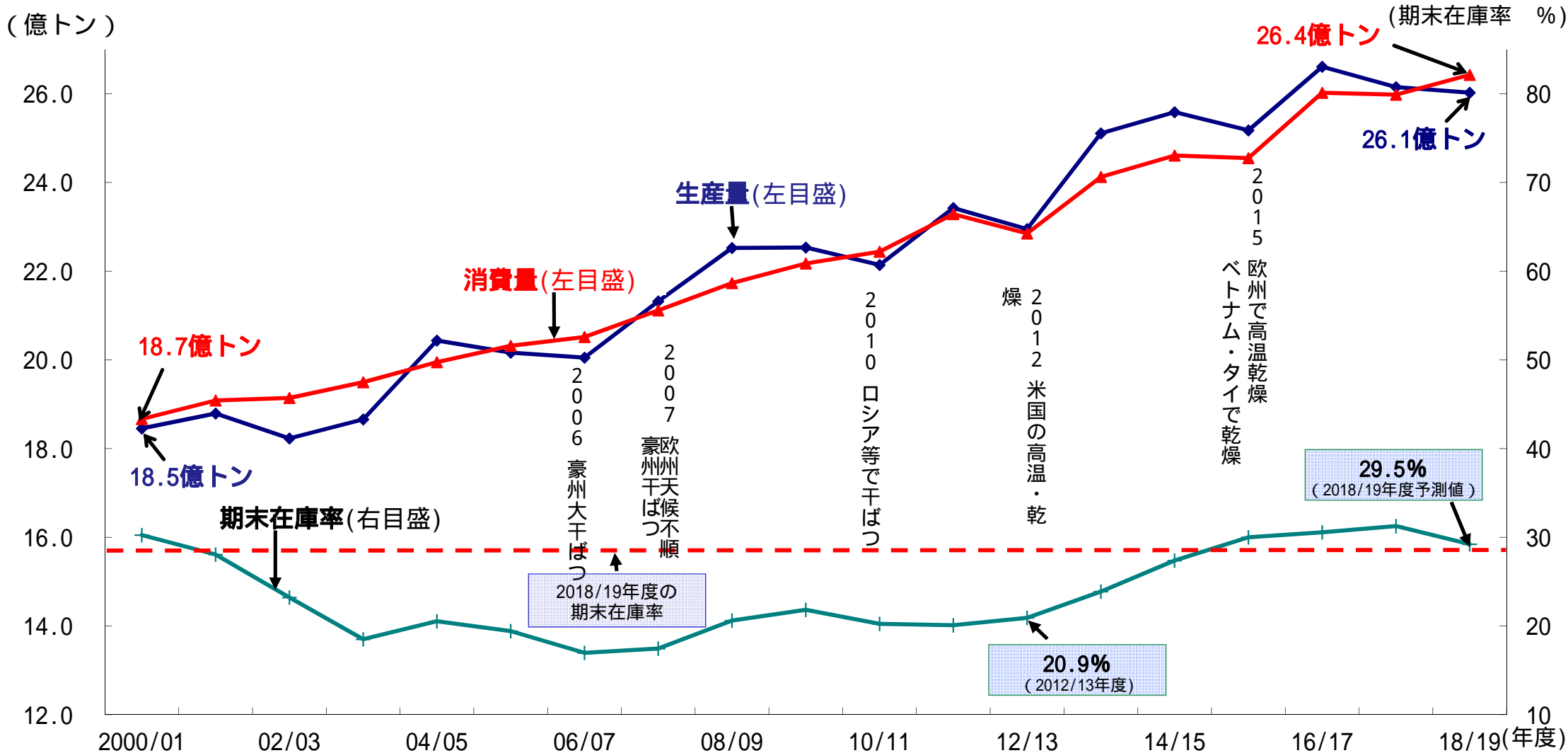
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である(なお、3月1日現在の米価格は2月27日の価格)。

注2：過去最高価格については、米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

## 資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2018/19年度は、2000/01年度に比べ1.4倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。

2018/19年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り29.5%となるものの、直近の価格高騰年であった2012/13年度(20.9%)を上回る見込み。



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(March 2019)。「PS&D」

(注)なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。 - 6 -

# 資料3 平成30年9月以降の食品小売価格の動向

加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

## 平成30年9月～平成31年2月の食品小売価格の動向

品目	消費者物価指数(総務省)											上昇率 (前年 同月比)	
	H26					H27				H28			H30
	平均	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月		
生鮮食品を 除く総合	97.7	100.0	99.7	100.2	101.0	101.3	101.6	101.6	101.4	101.2	101.3	0.7%	
食パン	98.5	100.0	101.1	100.9	101.4	102.4	102.7	102.5	102.6	102.4	102.5	2.1%	
即席めん	94.2	100.0	100.0	99.5	99.0	98.6	98.5	99.0	98.7	98.1	99.1	-0.3%	
豆腐	98.0	100.0	100.0	100.5	100.7	100.7	101.1	100.8	100.8	100.4	100.6	0.2%	
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	97.8	94.5	93.3	92.9	93.2	93.2	92.1	92.8	93.3	-1.3%	
みそ	100.6	100.0	99.4	99.1	99.6	100.0	99.7	99.3	99.7	100.9	100.4	1.6%	
チーズ	97.9	100.0	99.3	98.8	102.6	104.4	103.6	103.7	102.5	103.9	103.2	3.1%	
バター	95.0	100.0	101.5	101.7	102.0	102.0	102.1	102.2	102.5	102.3	101.8	0.3%	
マヨネーズ	103.5	100.0	98.1	96.7	95.3	94.8	95.5	95.8	94.6	95.5	95.5	-0.4%	

資料:総務省消費者物価指数

注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

## 【参考】平成30年10月～平成31年3月の食品小売価格の動向(速報値)

品目	食品価格動向調査(農林水産省)											上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)	
	H26					H27				H28				H30
	平均	平均	平均	平均	平均	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
食パン	99.3	101.7	102.6	101.3	102.3	105.6	105.6	106.0	105.4	105.4	105.6	0.2%	-	
即席めん	109.1	117.0	116.7	116.5	117.0	120.0	120.0	119.2	119.2	119.2	119.2	0.0%	-	
豆腐	101.9	101.6	98.4	97.2	96.9	99.2	98.7	97.9	97.9	97.9	97.5	-0.4%	-	
食用油 (キャノーラ油)	91.2	88.7	85.2	84.0	85.3	90.2	93.2	89.7	90.8	88.6	88.9	0.3%	-	
みそ	119.7	121.0	120.8	122.9	130.5	136.2	136.8	135.9	135.1	135.1	133.4	-1.3%	-	
チーズ	125.4	129.4	129.4	129.0	134.7	140.3	138.9	140.3	139.6	138.3	138.3	0.0%	-	
バター	112.0	118.4	120.0	120.7	121.2	121.1	121.4	121.4	121.4	121.4	121.4	0.0%	-	
マヨネーズ	112.2	110.6	109.8	108.9	108.9	115.5	115.1	114.7	115.8	115.8	113.2	-2.2%	-	

資料:農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)

注1:平成20年1月の価格を100とした指数で表記している。ただし、バターについては平成20年5月の価格を100とした指数で表記している。

注2:調査は原則、各都道府県10店舗で毎週実施。

注3:調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4:マヨネーズのH24平均値は調査を開始した平成24年10月～12月平均。

注5:平成30年9月までの調査結果と10月以降の調査結果は、特売品の価格の調査方法が異なることから接続しないので、上昇率(前年同月比)は算出していない。